

書評:小川隆『中国禪宗史——「禪の語録」導読』 (ちくま学芸文庫、2020 年)*

張 超 (Garance Chao ZHANG)
(訳) 猿渡留理

中国禪学に詳しい読者であれば、日本の駒澤大学の小川隆教授を知らぬ人はいないはずだ。小川氏は現代日本で最も代表的な中国禪学者で、1980年代より中国禪研究に尽力し、それに関する七部の専著や大量の単行・連載論文を出版しており、その研究は禪宗黎明期から元代以前までの時代をカバーしている¹。これらの成果は日本・欧米で賞賛されているのみならず²、著作二冊と論文一本が中国語訳された後は、中国語学術圏内において

* 原題：《中国禪宗史：“禪の語録”導読》(小川隆著，東京：筑摩書房〔ちくま学芸文庫〕，2020年，376頁)〔原文、中国語〕

原載：『唐研究』第26巻、北京大学出版社、2021年3月、〔書評〕頁611－頁622。

のち注を省き、本文に図版を加えたものが、オンライン書評紙『澎湃』に転載。「书评 | 传灯·清规·问答·语录—中国禅宗形成的思想史机制」张超 (法国高等研究实践学院法国东亚文明研究中心副研究员) 2021-08-22 10:00. https://m.thepaper.cn/newsDetail_forward_14158536

¹ 本書以前の著作を刊行年順に列挙すると以下の通り。

1. 『神会——敦煌文献と初期の禪宗史』(臨川書店、唐代の禪僧二、2007年)
2. 『語録のことは——唐代の禪』(禪文化研究所、2007年)
3. 『臨濟録——禪の語録のことはと思想』(岩波書店、書物誕生、2008年)
4. 『続・語録のことは——〈碧巖録〉と宋代の禪』(禪文化研究所、2010年)
5. 『語録の思想史——中国禪の研究』(岩波書店、2011年)
6. 『禪思想史講義』(春秋社、2015年)
7. 『「禪の語録」導読』(筑摩書房、禪の語録20、2016年)

² 欧米と日本の主要な書評に以下のものがある。ジョン・マクレイ (John R. McRAE) 「日本の禪研究と私——小川隆「神会」「語録のことは」の刊行にちなんで」(『東方』第320号、2007年。『禪文化』第207号、2008年再録)。1-3のフランス語の書評論文として、ディディエ・ダヴエン (Didier DAVIN) “Compte rendu”, *Journal Asiatique* 297, no. 2, 2009, pp. 547-558 があり、当該論文は飯島孝良によって和訳され『駒澤大学禪研究所年報』第23号、2011年に収録されている。アルバート・ウェルター (Albert WELTER) 著に5の英文書評があり、*International Journal of Asian Studies* 9, no. 2, 2012, pp. 257-261 に掲載されている。6の書評は苅部直「禪と朱子学、それぞれの思想体系を知るてがかり」(『東京人』

も大いに歓迎されている³。小川氏は個人研究のほか、中国語や英語で書かれた禅学の研究成果を日本学術界に紹介することにも特に力を注いでいる。その翻訳には、胡適（1891-1962）『禅学案』に収められた多くの古典的論文のほか⁴、アメリカの第一人者である故マクレイ氏（John R. McRAE, 1947-2011）の名著 *Seeing through Zen : Encounter, Transformation, and Genealogy in Chinese Chan Buddhism* の共訳があり、後者には自ら精細な解説を寄せている⁵。このほか小川氏は、入矢義高（1910-1998）や柳田聖山（1922-2006）ら先達の禅学者が創始した禅籍会読の伝統を承け、1990年代中期から東京大学東洋文化研究所において共同で読書班を開設し、『祖堂集』など極めて難解な一連の禅の基礎典籍を精読し、関連論文や訳注を出版している。当該読書班は日本の禅学者にとって定期的な交流の場であるとともに、次世代を担う禅学研究者を育成する場でもあり、さらには日本を訪れる多くの海外の学者をも引きつける魅力的な場となっている。それは今日、20世紀の京都の禅文化研究所に続く、新たな日本の禅学研究の

2015年11月号)に見える。このほか、本書が今年〔2020年〕4月に出版された後、一般知識人界の注目をも集めており、橋爪大三郎『中国禅宗史——「禅の語録」導読』（『毎日新聞』2020年6月27日）にその評が見える。

³ 5と6はそれぞれ以下に中国語訳されている。葛兆光序、何燕生訳『語録の思想史——解析中国禅』、復旦大学出版社、2015年。彭丹訳『禅思想史講義』、復旦大学出版社、2018年（同年、李承妍による韓訳も芸文書館より出版されている）。前者の日本語版の書評に易丹韵「『語録の思想史』評述」がある（『人文宗教研究』第3輯、2012年巻、宗教文化出版社、2013年）。小川氏の研究は、龔雋・陳継東『中国禅学研究入門』（復旦大学出版社、2009年、頁160-161、頁190-191）、周裕鍇『禅宗語言研究入門』（復旦大学出版社、2009年、頁57-58、頁151-154）および盛韵「小川隆談日本禅宗」（『東方早報・上海書評』2015.10.25第352期）等にも詳細に紹介されている。

⁴ 小川氏はとりわけ胡適の禅宗史研究を取り入れて紹介することに関心を寄せ、胡適本人の作品の詳細な訳注「荷沢大師神会伝」、「跋裴休の唐故圭峰定慧師伝法碑」、「Ch'an (Zen) Buddhism in China Its History and Method」等のほか、樓宇烈「胡適禅宗史研究平議」、葛兆光「仍在胡適の延長線上：有関中国学界中古禅史研究之反思」等、現代中国の学者の胡適禅研究に対する研究も日本語に翻訳している。

⁵ ジョン・R・マクレイ著、小川隆解説『虚構ゆえの真実——新中国禅宗史』（大蔵出版、2012年）。小川氏の解説は本書の内容を概説して和訳本の由来を紹介すると同時に、とくに第四章の「機縁問答」に関する論述に対して分析と批評を加えている。該書の中国語訳も近く出版される予定である——龔雋・蒋海怒『虚構与真実之間の禅史書写』（『読書』2019年第11期）参照。

拠点となっている。

小川氏の四十年來の禅學研究を見ると、その顕著な貢献は以下の三点にまとめることができる。まず、「唐代禅」の二大主流——馬祖禅と石頭禅を確定したことである。いわゆる「唐代禅」は小川氏が定める思想史の範疇であり、「唐代」とは断代史的な意味での唐代全体を指すのではない。それが指すのは、九世紀初めの徳宗・憲宗時代の馬祖（709-788）系以後であり、敦煌文献を基礎資料とする「初期禅」の後、大量の伝世資料をもつ「宋代禅」の前、にあたる。信じる資料は非常に少なく、若干の碑銘と五代宋初の禅籍『祖堂集』『宗鏡録』および『景德伝灯録』第28卷（唐末五代の禅師の語録集成）などに限られる。「唐代禅」は禅思想史の一段階として、第二次世界大戦後に入矢氏が言語学的・文献学的禅籍解読のモデルを打ち立てたのち、ようやく認識され始めたものだった。小川氏はそれを系統化したのちに、それまでずっと禅宗の史籍・灯史・文学において並立していた馬祖と石頭の二大系統の別を、思想史の面から実証した⁶。次に、禅宗の特徴のひとつである「機縁問答」⁷に通時的分析を加え、それを性質の大きく異なる二つの類型に区分した。すなわち、意味を有する「唐代禅」の「問答」と、意味を有さない「宋代禅」の「公案」である。禅僧の対話は、馬祖の時代、禅宗の特徴的な修行・指導の手段として登場したものが、それは一見非論理的で解読しがたいものであり、終始不変のものであったと考えられていた⁸。それに対し小川氏は、同一の対話（例えば著名な「庭

⁶ 詳しくは「唐代禅宗の思想——石頭系の禅」（『東洋文化』83、2003年）を参照。この後『語録のことば——唐代の禅』と『語録の思想史』第1章第2節で更に進んだ論が展開されている。

⁷ 「機縁問答」という言葉は柳田の「禅宗語録の形成」（『印度学仏教学研究』35、1969）の一文に由来し、のちアメリカの学会で“encounter dialogue”と訳されて、広く用いられている。以下を参照。McRAE, “The Antecedents of Encounter Dialogue in Chinese Ch’an Buddhism.” In Steven Heine and Dale S. Wright, eds., *The Kōan: Texts and Contexts in Zen Buddhism*. New York: Oxford University Press, 2000, p. 46-47.

⁸ 例えばこの主題をめぐるジョン・マクレーの論文には以下のものがある。“Encounter Dialogue and the Transformation of the Spiritual Path in Chinese Ch’an.” In Robert E. Buswell Jr. and Robert M. Gimello, eds., *Paths to Liberation: The Marga and Its Transformations in Buddhist Thought*. Honolulu: University of Hawai’i Press, 1992, p. 339-69; “The Antecedents of Encounter Dialogue in Chinese Ch’an Buddhism”, p. 46-74; “The Riddle of Encounter Dialogue: Who,

前柏樹子」の話)について、「唐代禅」と「宋代禅」それぞれの禅師の用法を詳細に分析したのち、両者の差異を次のように指摘している。すなわち、前者では宗門の共通の問題意識に基づきつつ、対話（「問答」）に理解可能な意味が内包されているのに対し、後者においては、対話（「公案」）はいかなる意味・論理をも超越した言葉のカタマリと看做される傾向にあり、うち後者の理解が今日まで続いている、と⁹。最後に、小川氏は上記の結論をもとに、宋代の「公案」を用いる禅をさらに「文字」禅と「看話」禅の二種に細分したうえで、両者の継承関係を指摘した。すなわち前者は、「公案」をめぐる展開した様々な批判や再解釈の文字活動であるのに対し、後者は「公案」が有する意味や理解を徹底的に排除し、単刀直入に参究することで、意識を極限まで追いつめて質的な飛躍を遂げさせ、その果てに大悟を得る、というものである。看話禅は往々にして文字禅の反動と看做されるが、小川氏によれば「文字禅」の精華たる『碧巖録』においてすでに、開悟を追求する実践的な意識が非常に強く、それが一つの方法として結実したのが看話禅であるという¹⁰。

以上三つの創見は本書『中国禅宗史——「禅語録」導読』（以後『中国禅宗史』と略）の中にすべて反映されている。本書は禅籍の訳注である「禅の語録」シリーズの最終巻として2016年に東京の筑摩書房から出版されたもので、その後好評を博し今年〔2020年〕4月には携帯に便利な文庫本が再版された。文庫版の内容は基本的に初版と一致するが、新たに後記が加えられている。「禅の語録」シリーズは入矢氏と柳田氏の共同監修のもと、1969年以降に刊行されたもので、計二十巻・二十二冊となっている。各巻の題名、編訳者、出版年は以下の通り¹¹。

1 『達摩の語録——二入四行論』、柳田聖山、1969年。

What, When, and Where?», *Seeing through Zen*, p. 74-100. [日訳、頁 105-138]

⁹ 詳しくは以下を参照。「庭前の柏樹子——いま禅の語録をどう読むか」（『思想』2004年4月号）、『臨濟録——禅の語録のことばと思想』。前者は「序論」として『語録の思想史』に収録される。

¹⁰ 「趙州の七斤布衫——禅問答の思想史」（『駒澤大学大学院仏教学研究會年報』39、2006年）。「文字」禅と「看話」禅の観点について、詳しくは『続・語録のことば——「碧巖録」と宋代の禅』および『語録の思想史』第2章第5節を参照。

¹¹ このシリーズや小川氏のいう「語録」は、禅宗の各時代を代表する広義の古典の謂いであり、狭義の禅の文体、つまり宋代に大量に現れた、一人乃至複数の禅師の説法録のことではない。

- 2 『初期の禅史Ⅰ——伝法宝紀・楞伽師資記』、柳田聖山、1971年。
- 3 『初期の禅史Ⅱ——歴代法宝記』、柳田聖山、1976年。
- 4 『六祖壇経』、中川孝、1976年。
- 5 『馬祖の語録』、入矢義高、1984年。
- 6 『頓悟要門』、平野宗浄、1970年。
- 7 『龐居士語録』、入矢義高、1973年。
- 8 『伝心法要・宛陵録』、入矢義高、1969年。
- 9 『禅源諸詮集都序』、鎌田茂雄、1971年。
- 10 『臨濟録』、秋月龍珉、1972年。
- 11 『趙州録』、秋月龍珉、1972年。
- 12 『玄沙広録』上中下、入矢義高監修、唐代語録研究班編、1987-1999年。
- 13 『寒山詩』、入矢仙介・松村昂、1970年。
- 14 『輔教編』、荒木見悟、1981年。
- 15 『雪竇頌古』、入矢義高・梶谷宗忍・柳田聖山、1981年。
- 16 『信心銘・証道歌・十牛図・坐禅儀』、梶谷宗忍・柳田聖山・辻村公一、1974年。
- 17 『大慧書』、荒木見悟、1969年。
- 18 『無門関』、平田高士、1969年。
- 19 『禅関策進』、藤吉慈海、1970年。
- 20 『「禅の語録」導読』、小川隆、2016年。

いずれの巻もみな厳密な校勘のうえでテキストを確定しており、唐宋口語史研究に基づいた精確な訳読をおこない、歴史学文献学の知識を大量に含む詳細な注釈と精彩ある解説を加えている。これにより禅宗の典籍は日本の宗学の「伝統」から実質的に解放され、中国古典文献のひとつとして学術的に分析されることとなった。その規模・レベルのいずれにおいても、このシリーズは今日にいたるまで日本の中国禅籍訳注の最高水準を示しており、多くの学者と修行者にとって必読の書となっている¹²。当初、両監修

¹² 著者は『中国禅宗史』の「文庫版あとがき」において、初版刊行後に出版された重要な禅籍の訳注の四つの成果を補足しており、それらはいずれも『新国訳大蔵経 中国撰述部』に収められている（大蔵出版、2019年。前の二種は①-7、後の二種は①-6に収録）。1 斎藤智寛『六祖壇経』（敦博本）、2 衣川賢次『臨濟録』（天聖広灯録 臨濟章）、3 土屋太祐『法眼録』（五家語録）、4 柳幹康『無門関』（寛

者により『語録の歴史（総論）』が執筆される予定であったが、未完のままシリーズは絶版となった。それが後に復刊されるにあたり、小川氏が両監修者に代わって『「禅の語録」導読』を執筆し、読者の系統的な各冊の閲読、および各冊の関係の歴史的理解に供したのであった。

『中国禅宗史』は「禅の語録」シリーズの導読と中国禅語録研究の大綱を示すものであり、著者の学術的軌跡の縮図であると言えよう。著者は簡潔で魅力のある胡適の唐宋禅宗通史の影響を深く受けていると率直に述べ（頁308）、同様に通史の執筆に傾注している。実際のところ著者の以前の著作においても、「初期禅—唐代禅—宋代禅—日本近代禅」という総体的な構想が貫かれている。かかる構想の思想史の部分はすでに先の専著『禅思想史講義』において構築されており¹³、本書はそれに教団史・制度史等の要素が加わることで、より総合的な禅宗通史となっている。本書の主要な部分は五章から成る。第一章「「禅」とは」で著者は、宗派として確立した「禅宗」の定義を見直し、以下三つの特徴を提示している。それは（1）灯史における系譜、（2）問答と語録、（3）清規であり、それらは、それぞれ禅宗の歴史叙事・修行方法・僧団組織という三つの側面に対応している。その後、読者が「唐代禅」の基本的な考えと雰囲気を感じられるように、著者は「禅」そのものについて直接的に定義するのではなく、個々の語録を読み解くという手法を採用している。たとえば、著名な「丹霞烧仏」の問答は、往々、禅宗の偶像破壊の精神を具現化したものと看做される。ところが著者によれば、超越性の否定は「唐代禅」の重要な要素ではあるものの、その全てではない。その本当のねらいは偶像破壊ではなく、偶像や神聖なる主体を立てることそのものを根本から抑制することにあるという。このことを示すために、「唐代禅」を主軸として、「牛頭と四祖の怖れる様」「南泉と帰宗が虎に遇う」「南泉と土地神」「瀉山と仰山が柿の供養を受ける」など多数の問答と付随するコメントを精読し、それらがみな仏教の伝統的な神異観（修行により聖性と超自然的な能力が獲得できるという見方）に反対するものであって、修行を日常の経験の中に落とし込み、所謂「神通妙用、運水搬柴」の禅の理想を実現するものであると論じてい

永刊本）。

¹³ この書の執筆意図について、詳しくは「講義のあとで——読書案内」を参照。日本語版、頁237-244、中国語版、頁163-168。

る。このような「聖と成ることを抑制し、日常を肯定する」という精神と偶像破壊とは表裏一体の関係にあり、ともに「唐代禅」の基本命題となっている。

第二章「伝灯の系譜」は主に第一章中の三大特徴の第一項について述べたものである。読者がこのシリーズの各語録に見える意識の背景を理解できるように、本章では宗門の伝統的な伝法の系譜、すなわち仏法が仏祖釈迦牟尼から摩訶迦葉などインドの二十八祖師によって継承されてから、菩提達摩を経て中国の東土六祖、さらには南宗の「南岳一馬祖」「青原一石頭」の両系統に伝わり、後に五家七宗が成立するまでの過程を紹介している。この世俗の族譜に似た宗教の系譜は、禅宗を構成する者から等しく公認されるとともに、一般の人々にもよく知られ、かつてはそれが禅宗の実際の歴史を反映したものと理解されていた。ところが20世紀になると学術的な検証が加えられ、宗教的身分と派閥闘争に用いられた神話的虚構へと還元された。史実ではない系譜を敢えて本書に収める理由について小川氏は、マクレー氏からの影響であると述べたうえで、虚構性こそが宗教の真実の表れであると看做している¹⁴。著者は禅宗の系譜を「想像の共同体」とみなしており、その中の一員になることは、すなわち釈迦牟尼仏を初めとする無数の祖師たちと同質かつ等価となることであり、自己と共同体とがひとつであるという認識を得ることにより一体感と連帯感を生み出すことができた。このような個体ひとりひとりをひとつの系譜として連ね合わせた禅の共同体は、必然的に整然と秩序だったものであり、求心力と遠心力を兼ね備えている。それは過去にも未来にも無限に伸張するものであり、それゆえこの系譜こそが、近世に禅宗が言語・文化の差を越えて東アジア一帯に浸透し、20世紀には欧米を風靡する鍵となった要素のひとつに他ならないのである。本章の紹介は主に系譜の文字資料——「灯史」——に依拠する一方で、僧人の伝法の系譜に対する叙述・評論を日中の禅語録・公案中から多く採録し、宗門内の系譜を吸収する様々な策略を示している。このほか、本章第四節で馬祖系の師承関係を説明する際に、三大特徴の最後のひとつ——馬祖の弟子の百丈懐海（720-814）が創出したと伝えられる禅林清規、および後の宋元代の清規を引いて、禅宗の僧団組織は馬祖系の「平常心是道」の外化・実践であると強調している。

¹⁴ ジョン・R・マクレー著、小川隆解説『虚構ゆえの真実——新中国禅宗史』第一章。

第三章「問答・公案・看話」は三大特徴の第二項に対応しており、「機縁問答」の構造、用い方、および唐宋時期の変遷を鮮明に素描している。著者は宋初の『景德伝灯録』に見える唐代の禅師徳山宣鑑（782-856）の上堂法語「今夜は問話するを得ず」を例とし、「唐代禅」の「問答」は一見不可解であるが、類似のテキストを対比して、それが生まれた背景を復元すれば、そこに潜む論理を捉えられると論じる。たとえばこの徳山の問答が伝えたいのは、禅の修行は外に向かって求めるべきではなく、禅師が人に授けるべきものは一法たりとも存在しない、ということであるという。くわえて著者は、宋代臨済宗の五祖法演（?-1104）系の禅師がこの問答を用いて説法する際の一連のキーワード（「乾曝曝」「鉄酸餡」「没滋味」「鉄楸子」）に光を当て、「宋代禅」が問答を徐々に改造していった流れを掘り起こしている。五祖法演・圓悟克勤（1063-1135）師弟の創意が、公案の語義理解を徐々に削り去り、それを無意味な言葉のカタマリと看做し、いかなる思考をも断ち切る形で消化していくことを修行者に求めることにあったとすれば、圓悟の弟子の大慧宗杲（1089-1163）は、かかる言語の断片化を極限まで推し進め、「看話」禅という実践方法を練り出し広く普及させたのだと言える¹⁵。

以上の三章を通覧すれば、一般の読者は、中国禅に対する基本的な理解を概ね獲得するとともに、禅語録を読むために必要な知識と心理的な準備を整えられる。その後の二章は明らかに、より熱心な中国禅の愛好者と専門家に向けて書かれたものであり、禅学研究の奥深い道が提示されている。うち第四章「唐宋禅宗史略」は中国禅発展の歴史性に対する考察である。それは先述の禅宗三大特徴が形成された過程を描写したもので、その内容は「初期禅」「唐代禅」「宋代禅」という三つの大きな部分からなっている¹⁶。この章の多くは第二章「伝灯の系譜」に呼応しており、禅宗の「想像の共同体」を形成する重要な要素、例えば「慧可断臂」「南頓北漸」「百丈清規」などをひとつひとつ解体している。これらの鏡に投影された姿を見

¹⁵ 以上「文字」禅から「看話」禅までの連続的な変遷過程については別の場所でも重ねて述べられている。注10を参照。

¹⁶ 当該の章の主軸について、詳しくは小川隆「禅宗の生成と発展」（沖本克己編集委員・菅野博史編集協力『興隆・発展する仏教』新アジア仏教史07中国Ⅱ隋唐、第5章、佼成出版社、2010年）を参照。中国語に積果鏡訳「禅宗の形成と開展」（『興盛開展の仏教』新亞洲仏教史中国Ⅱ隋唐、法鼓文化、2016年）。

ることで、読者はより直感的に伝説と現実の落差を体感し、宗教の歴史構築がもつダイナミクスをも考えることができる。胡適以来、東西の数世代の学者の努力のもと、唐宋禅宗史の主な枠組みはすでに学界の共通認識となっており、その紹介も数多くなされている。そこでここでは贅言を避け、小川氏が記す通史の特徴を二つだけ指摘したい。第一に、今までの中国禅宗史の著作と比して、本章は思想史を主軸とする希有な作品となっている。馬祖以降の禅テキスト（主に作者のいう「問答」「公案」とその解釈、および各種僧伝と韻文）はその難解さの故に、多くの研究者を引きつけるとともに、その参入を拒んできた。そのため馬祖以後を対象とする禅宗史研究は、その思想に踏み込まず、僧団の社会政治背景の分析に傾斜するのが常であった。それに対して小川氏は、卓越した文献読解能力を十分に発揮し、その長年にわたる禅宗史研究の成果を踏まえつつ、内側から禅を活写することに成功している。これは斯界において長らく待望されていた快挙である。本章が示す唐宋禅思想の発展の流れは、今後禅の歴史を叙述するうえで、欠くべからざる部分となるであろう。第二に、本章はほぼ一次文献から構築されている。そこで引用されるのは、宗門内部のテキスト、および碑文、小説、士大夫の文集、正史などであり、鍵となる文献の分析のうえに各時代の禅が祖述されている。著者は特定の事柄に関する様々な資料を横に並べて比較し、歴史的叙述に到るまでの複雑な過程を明示する一方で、各段階の様々なテキストを縦に並べ、思想が発展する深層の伏線を追っている。例えば「初期禅」の菩提達摩の「二入四行論」と「唐代禅」の馬祖思想の継承関係などがこれに当たる。かかる比較の視点により本章は、禅宗史執筆の通弊——単なる事項の羅列や静的モジュールの「窠臼」——を脱し、禅宗史の展開をあたかも推理小説のごとくダイナミックに提示しており、これにより読者は各種情報を統合してその歴史展開を理解することが可能となっている。著者の極めて巧みな執筆はとりわけ、「初期禅」の部分で功を奏している。この時代の禅は様々な要素が複雑に絡み合うとともに、その要素も真偽入り乱れているが、小川氏はそれを有機的に組み合わせ、当時の禅宗展開の不確定性を俯瞰的に実感する視座を読者に提供している。

最終章「二十世紀の中国禅研究」は、近現代の日本における中国禅の研究史を回顧している。これは一見、上述の古代中国禅に関する各章と関連していないため、語録の閲読に関心のある読者は本章が収録される理由に

ついて疑問に思うかもしれない。しかし評者の卑見によれば、本章こそが本書にとって肝心要の欠くべからざるものに他ならない。学術的に見れば本章は、日本禅学研究の立場からその執筆の背景と起点を明示するものであり、それと同時に、欧米の研究に内在する文脈の整理に役立つものともなっている。なぜなら欧米の禅研究はそのかなりの部分が、日本の禅学研究を換骨奪胎したものだからである。また本章において著者は、自身が身を置く学術の伝統を顧み、人文に対する思いを露わにしている。本章の構成は20世紀の前半および後半に対する論述の二つから成り、うち前半は主に胡適と鈴木大拙（1870-1966）の禅学研究について論じている¹⁷。この二人は従来、お互いに相容れない立場にあったと見なされていたが、著者は独創的な新たな見地を示し、その交流と共通認識を指摘・強調している。まず二人の学術「論争」について言えば、二種類の宗教研究法——「合理的知性主義」と「体験的直観主義」——の対峙・衝突を反映しているとい一般的に考えられていた。それに対し著者は、彼らの対立は論点ではなく、立論以前の立場にあると看する。つまり民国期中国の思想家である胡氏が物質的な近代化のために精神の近代化を求めていたのに対し、明治期日本の思想家である鈴木氏は、物質的近代化の表面的成功の後に思想の袋小路に入り込んでいたというのである。実際のところふたりは五十年代の禅学案以前において、互いの立場を十分に理解し尊重しており、論文においても相手を論駁しようという意識はなく、ただ自分の意見だけをそれぞれ述べている。加えて著者が指摘する通り、一般的な「直観主義者」の想像に反して鈴木氏は、胡氏同様、禅思想の古層を求めて敦煌文献を二三十年代に研究しており、その成果は『禅思想史研究』第一、第二などの書にまとめられている。そこで鈴木氏は「初期禅」と「伝統禅」を意識的に区別し対比させている（「伝統禅」とは宋代の大慧の「看話」禅に源を発し、江戸時代の禅僧白隠が基礎を定めて今日まで続く「公案」禅であり、鈴木氏自身が実践し宣揚した体験的な禅学であった）。また彼は敦煌文献や盤珪・妙好人を用いて、両者を統合する現代禅思想を作り出すことに傾注している。

本章の後半部分において著者は、俯瞰的視点から1960年代以降今世紀末までに日本で生み出された膨大な量の禅研究の成果を以下の三系統にま

¹⁷ 『語録の思想史』第三章「胡適と大拙」および「敦煌文献と盤珪」（『禅文化』237号、2015年、頁19-27）の一文に基づく。

とめている。(1) 狭義の「客観的」史実にのみ焦点を当てた「禅宗史」研究、(2) 「唐代禅」の語録の中国古典学的訳読と注解、(3) 「伝統禅」と西洋の現代思想を結び付ける「絶対的な禅」の哲学的な研究、である（頁338）。うち第三と第一の研究の序幕はいずれも1967年に偉大な出版物により開かれた。「伝統禅」の言説を代表するのは、『講座禅』のシリーズ（全八巻）である。このシリーズは鈴木氏の監修、西谷啓治の編纂によるもので、本文を執筆したのは主に師家（禅の老師）、宗門の学者（禅宗の学僧）、京都学派の哲学者であり、みな白隠禅の参禅経験をもとに、時空の制限を超えた絶対的な「禅そのもの」の存在を前提としたうえで、「禅」を20世紀の一種の現代思想と看做す傾向を有していた。その一方で、柳田氏の『初期禅宗史書の研究』も同じ年に世に問われたもので、「禅宗史」学派の成立を表す象徴となっている。この書は胡適の実証主義的な手法を継承しながらも、胡適の単純な「伝統破壊」とは異なり、伝統的な禅宗の歴史叙事（灯史）の虚構性を認識すると同時に、敦煌文献と碑文資料の助けを借りて、それが生まれた背景と形成過程を詳しく研究している。これが生み出した圧倒的な影響により初期禅宗史の研究は大きく推進したが、その一方で「客観的」事実のみを追い求めて思想研究に踏み込まない一面的な傾向を生み出すことにもなった¹⁸。第二の研究の始まりは、まさしく中国古典言語学・文学研究者の入矢氏に求められる。彼の指導のもと、以上の「初期禅」と「伝統禅」をつなげる「唐代禅」の研究がようやく可能となった。この一派の成立を示すものが本書の初版の収録された『禅の語録』シリーズであり、また上述の『祖堂集』などの多くの禅籍会読班の開催であった。

ここまで読むと、本書の執筆意図はさらに深い意味を呈してくる。それは著者自身の研究の集大成であるのみならず、入矢式の研究を最も包括的に紹介するものとなっているからだ。入矢氏の主な後継者のひとりとして小川氏は、この学派の流れ、とりわけ入矢氏本人について知悉している。彼は本書において入矢氏の各論考に散見される研究の経歴を三段階にまとめている。第一が、日本の宗学の伝統的な訓読法から脱却して、唐宋の口

¹⁸ 同じく1967年に、太平洋を隔てたアメリカの学者フィリップ・ヤンポルスキー（Philip Yampolsky）が、後世の米国禅学界に深い影響を与えた『壇経』の英訳本 *The Platform Sutra of the Sixth Patriarch* (New York: Columbia University Press) を出版し、これにより柳田派の禅宗史研究がアメリカにも普及していった。

語で書かれた禅籍を語学的に精読する段階である。第二が、漢語史研究の手法より啓発を受けて、多くの類似した禅問答を対照することで語義と語法を帰納し、そこから問答に潜む意味を理解する段階である。そして第三が、これらの基盤のうえに歴史的観点を加えて、禅問答の思想史的研究の道を切り拓いた段階である（頁340-342）¹⁹。過去に対するこのような把握があってこそ、入矢派ひいては日本の中国禅研究の未来を拓くことが可能となる。そこで著者は、本書の最後にふたつの希望を提示している。ひとつは方法の面で今後、語録の精読を基礎とした思想史研究に柳田氏の「禅宗史」の実証史学的手法を取り入れ、語録以外の史料と結びつけて考察が進められること。もうひとつは課題の面で、五代の時代を重点に置き、これまでの中国禅宗史に欠けていた部分——「唐代禅」が五代の時代にいかに総括され転換されて「宋代禅」が生み出されていったかという問題——を解明することである（頁346-347）。

理論上の指導のほか、小川氏は本書の執筆においても入矢派の研究方法を全面的に貫徹しており、語学的に文献を精読する熟練した技巧が余すところなく発揮されている。著者のさまざまな出版物には、終始、読者中心の稀有な著作態度——学術性を確保しながら、遙か昔の古代禅の世界を今日の我々に引き寄せ、高みにある宗教を一般の人の身に下ろして共鳴できるように最善を尽くす配慮——が現われている。教育的に禅の語録を読み解いているのは、この態度の一つの現れである。すなわち、謎かけのような中国語の原文をすべて引用した後に、逐次的な訓読と現代日本語訳を添えることで、読者は著者に従って唐宋の漢文を学ぶとともに、著者の文字理解の精密さとテキスト解釈の柔軟さに驚嘆できるのだ。このように実地に範を示す手法は、元来「理解しがたい」禅を人文科学と理性的な思索の対象へと効果的に復元するとともに、読者が心理的負担を感じることなく、それに続いて徐々にこれらの文字を把握する勇気と楽しみを持つことを可能としている。このようなテキスト中心の進め方によって小川氏の立論は明晰な筋道を獲得しており、空理空論や単なる概念の羅列に終始する一般の禅思想研究とは全く異なるものとなっている。

¹⁹ 小川氏は『増補・自己と超越——禅・人・ことば』（岩波現代文庫、2012年）の「解説」において入矢氏の生涯と学問について叙述する際にも、同様の見方を述べている。

実際のところ、本書の第四章「唐宋禅宗史略」は、まさに著者が自己の上記の学問的志を実現した最初の試みであり、今後の禅宗史研究に対して言語学と実証史学とが互いに補完していく基調を確立しており、その意義は極めて大きい。評者は本章を学ぶなかで非常に啓発を受け、禅宗史執筆の大づかみな思考と見通しを得ることができた。ここでは本文の結びとして、また今後評者自身の目標として、試みにその幾つかを挙げたい。まず、本書では、それ以前の時代に比して「宋代禅」の比重がかなり軽くなっている。「初期禅」「唐代禅」「宋代禅」という三つの時期が全体に占める紙幅の割合は、それぞれ、四割弱、四割強、約二割である。これは著者本人の研究の比重を反映しているが、それと同時に、これまでの学界の研究状況をも如実に反映している。小川氏はこの不足を明確に意識しており、「文庫版あとがき」でそのことを率直に語っている。20世紀において「宋代禅」は、東西学界の一部の断定と偏見によって、長らく研究対象から外されていた。しかし今世紀に入ると一部の学者たちがその価値を次第に意識しはじめ、中国禅発展の「クライマックス」と称えてさえいる。なぜならその豊富な文献と文化遺産は、後代の中国禅と中国仏教の出発点であるだけでなく、今日の東アジア禅および世界の様々な禅仏教の母体ともなっているからである。したがって、宋代時期の禅宗史も唐五代と同じように重視されるべきなのである。次に、本史略は唐宋時期の禅宗そのものの思想と言語の発展の軌跡を見事に描き出しており、また政治と宗教の関係、および文人儒者の意識形成の角度から宗門の発展の理解についても、必要な手がかりを提供することに十分留意してはいる。しかしながら、僧団組織（例えば寺院文化）と僧団の社会的活動（例えば地方社会との連動）など、「形而下」の側面に対する言及はかなり少ない。僧伝・清規・寺院経済・物質文化などに関して日進月歩の進展を遂げている研究成果を今後さらに結びつけることができれば、禅宗史の著述はさらに立体的で充実したものになるであろうし、「形而上」の発展に現実的な立脚点を探し出すこともできるかもしれない。また次に、唐宋の時代は中国宗教の成熟期であり、この時期には天台・律・浄土など各種の仏教信仰と道教などの本土の信仰も社会の各階層に軽視できない影響を生み出している。例えば一部の研究が既に指摘する通り、天台の祖統説が禅の法系の形成に直接の影響を与えている。それに対し本史略では他の仏教諸派や信仰伝統への言及が少なく、当時の一般民衆の宗教生活の全貌が読み取り難く、その結果読者は禅宗の発

展をそれのみで単独に理解することになる。

最後に、禅宗史の時代区分について、一言しておきたい。著者の「初期禅—唐代禅—宋代禅」という区分は、おそらく禅文献の時代的断層に基づいているのだろう。禅の学者たちは長らく、敦煌文献、『祖堂集』を代表とする唐末五代の文献、および宋代以後の文献を利用して、それぞれ、南北朝の初祖達磨から八世紀初めまで、八世紀から十世紀まで、宋代およびそれ以後、の三つの異なる時期の禅宗の発展を研究してきた。それゆえ著者もごく自然にこの区分に基づいて禅宗史を理解したのだろう。しかし、その一方で、この区分は、古人の所説の影響も受けているかもしれない。例えば室町時代の禅僧夢窓疎石（1275-1351）は『夢中間答』において、禅宗史を（1）馬祖・百丈以前の「理致」の時代、（2）馬祖・百丈以後の「機関」の時代、（3）圓悟・大慧以降の「公案」の時代に区分しており、小川氏も著述においてそれをしばしば引用している²⁰。また著者は最近の論文において、『朱子語類』の以下の一節も引いている。「禅のことを語ったおりに、先生（朱熹）はこう言われた。「仏教が中国に伝わった当初は、ただ『四十二章経』一つが有るだけで、その後ながらく、言うほどのものは無かった。南朝の時代以後、ようやく教理の展開がなされたが、それもやがて行きづまった。達磨の禅宗になってから、そうした教理が一掃されたが、それでも初めの頃は、ただ、はっきりとよく解る問答をやっていた。だが、やがて、それも行きづまり、そこでひたすら「無頭話」（内実の無いことば）ばかり説くようになった。「乾屎橛」とか「柏樹子」の類は、人に（思慮を忘れて）茫然とさせるだけのもの」である、と。ここで朱熹も、中国仏教史を三期に分けている。すなわち、（1）六朝までの経典と教理の時代、（2）達磨以後の有意味な問答の時代、（3）その後の「公案」の時代である²¹。このほか全体から見て、小川氏の中国禅宗史観は彼の世代の日本の学者が身を置く先述の禅研究の三系統からも深い影響を受けており、実証禅宗史派が「初期禅」に、古典言語学派が「唐代禅」に、哲学派が「宋代禅」に、

²⁰ 『語録の思想史』、頁36、注17。中国語版は頁25、注①。『禅思想史講義』、頁132。中国語版は頁90。『「禅の語録」導読』、頁158。『中国禅宗史』、頁210。

²¹ 王聖賢点校『朱子語類』卷126、「釈氏」篇、第80段（中華書局、理学叢書、1986年、頁3028）。小川「唐代禅から宋代禅へ——馬祖と大慧」、国際研討会“Song-Dynasty Chan. Interdisciplinary Perspective on an East Asian Buddhist Tradition”、パリ、コレージュ・ド・フランス—ソルボンヌ大学、2020年2月27-29日。

それぞれ対応する形で時代区分の脈絡が形成されている。

日本とアメリカの禅学において中唐・晩唐・五代を「古典禅」「經典禅」「純粹禅」の時代と呼ぶのが一般的であるのに対し、本書が「唐代禅」という名称を用いたのは、この時代の禅宗に対する理想化を意識的に避けたからであり、合理的な処置である²²。しかしながら、「唐宋変革」モデルが中国史の分野で多くの議論を巻き起こしたのと同様、近年では「兩宋変革」「宋元明変革」「宋元変革」など様々な仮説も現れており、中国禅研究においても近年、五代と北宋の連続性を強調する新しい傾向が見られるようになってきている。例えばアメリカの学者アルバート・ウェルター（Albert Welter）とベンジャミン・ブローズ（Benjamin Brose）は、十世紀の東南地区における禅宗教団の歴史を考察したうえで、一般に「宋代禅」特有のものとする政治と宗教の関係、僧団組織および書写の伝統は、閩・南唐・呉越国などの政権期にすでに形成されており、北宋時代にそれが受け継がれ発展したことを指摘している²³。また一方で、評者が宋代の禅宗を学び研究する過程でしばしば感じるのは、北宋と南宋も決して一枚岩ではなく、思想・書写・組織・制度のいずれについても北宋は概ね過渡期にあたり、前の時代の痕跡をかなり残し、様々なモデルが併存していたということである。その後、東アジア諸国に根付き、今日まで広く伝わっている禅の宗教的パラダイムは、北宋末期から南宋初期（十二世紀以降）に確立され、元時代に揺るぎないものとなった可能性が高い。今後、五代と宋代の禅に対する認識が深化してゆけば、伝統的な禅宗の時代区分モデルを打破し、禅宗の発展そのものを基点とする、より緻密な中国禅宗史を構築することができるのではあるまいか？

²² もうひとつの類似した例はマクレーであり、彼は *Seeing through Zen* のなかで中国禅史を「原始禅」（Proto-Chan）、「初期禅」（Early Chan）、「中期禅」（Middle Chan）、「宋代禅」（Song-Dynasty Chan）の四段階に分け、そのうえで「中期禅」がいわゆる「古典禅」（Classical Chan）と異なることを明示している。前者は歴史的な時代区分であり、後者は特殊な宗教的行為のモデルであるとするのである。 *Seeing through Zen*, p. 76. [日訳、頁 108]

²³ WELTER, Albert. *Monks, Rulers, and Literati. The Political Ascendancy of Chan Buddhism*. New York: Oxford University Press, 2011. BROSE, Benjamin. *Patrons and Patriarchs. Chan Monks and Regional Rulers during the Five Dynasties and Ten Kingdoms*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2015.